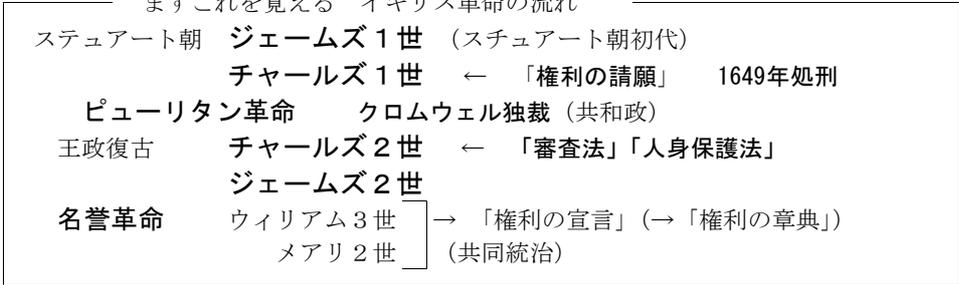


イギリス革命の要点



エリザベス1世を最後にテューダー朝は絶え、17世紀初めからのステュアート朝初期4代は全員暴君！ この4人の順をまず覚える。理系の生徒さんが「加法定理だ」と言った！ $\sin(\alpha + \beta) = \sin\alpha \cos\beta + \cos\alpha \sin\beta$ なるほど。AB+BA型だ。但し、引数が $\alpha \beta$ $\alpha \beta$ ではない。「ジェームズ・チャールズ・チャールズ・ジェームズ・1世・1世・2世・2世」と覚えてしまおう。超頻出なので、役に立つ「公式」となるだろう。

まずこれを覚える イギリス革命の流れ



「権利の請願」「審査法」「人身保護法」という重要な議会文書が、どの暴君に宛てて出されたかも覚えよう。

最初がジェームズかチャールズか迷ったら、イギリスの諜報機関MI-6の007、ジェームズ=ボンド(架空の人物)を思い出そう。ご存じのようにイギリスは、サッカー発祥の地なのでFIFAには4チームも出せる。王家を持つイングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドの4地方。現代の国境線に注意。アイルランド島北部の英領土はクロムウェルの征服に起源を持つ。後掲記事参照。

イギリス革命前夜

ステュアート朝初期の4代は専制政治を行った！

- 1) 【1: 】位1603-25 James I スコットランド王家からイギリス王になり、【2: 】を創始。
【3: 】を唱え、特権商人を増やし議会を無視。国教会との結びつきを強め、ピューリタンを圧迫。
1620年、**ピルグリム=ファーザーズ**102名がメイフラワー号でニューイングランドへ移住したのは【1】の時。06J
- 2) 【1】の次男【4: 】位1625-49は議会の同意なしに課税、国教会を強化、ピューリタンを弾圧。
親子2代の悪政にたまりかねたイギリス議会はチャールズ1世に対し、1628年、【5: 】(あるいは権利請願)を提出した。その要点は、①議会の同意なく課税しないこと。②法律によらず国民を逮捕しないこと。
「1. 国王は……国会の承認なしに法律を停止し……うる権限があると称しているが、**そのようなことは違法である。**(以下省略)」この独特の言い回しの文書は「権利の請願」ではなく「**権利の章典**」(1689)であるから注意しよう。
チャールズ1世はこれに応じず、1629年、一方的に議会を解散させた。→無議会時代(～1640)
- 3) チャールズ1世は、カルヴァン派(長老派)の強いスコットランドに【6: 】の制度を強制した。これに反発したスコットランドが1639年、反乱を起こした。
スコットランドでは16世紀の宗教改革で長老派教会(カルヴァン派)が確立していた。イギリス議会の長老派はその政治勢力であり、議会派内の穏健勢力だったが、1648年、独立派により長期議会から排除された。
①「短期議会」……1640年4月、チャールズ1世は、スコットランドの反乱軍鎮圧の費用を得るため11年ぶりに議会を招集したが、議会は王に反抗。王は**3週間で議会を解散させた**。このため「短期議会」と呼ばれている。
②「長期議会」……1640年11月～1653年4月 チャールズ1世は、スコットランドの反乱軍に敗れ、賠償金支払いのための課税承認を得るため再度議会を招集した。この議会はクロムウェルが解散させるまで長期にわたって続いた。この議会は、課税を承認しないまま国王の特権をつぎつぎと奪い取った。国王は軍事権と教会支配権は手放そうとせず、武力で議会を押さえ込もうとした。議会派、王党派の対決が徐々に深刻化、もはや内戦は避けられない情勢となった。両派の内容はおよそ次のとおりである。

	議 会 派	王 党 派
主張	早期和平……長老派(立憲王政・長老制教会) 徹底抗戦……独立派(王権制限・産業の自由・信仰の自由) 更に急進的……水平派(共和政・普通選挙・信仰の自由)、平等派とも言う。	絶対王政・国教会支持
宗教	ピューリタン※が多い。	国教徒
地域	イングランド東部・南部	イングランド西部・北部
中心	ロンドン	ヨーク

※イギリス国教会を内部から改革しようとする人々。カルヴァン派の影響を受けているが長老派とは異なる。

ピューリタン革命

通常、内乱開始(1642)から、チャールズ1世処刑(1649)までを指す。

- 1) 1642年ついに武力衝突＝「**第一次内乱**」の開始 議会派の国軍 VS 王党派の国軍
開戦時は王党派が優勢だった。議会派(独立派)の【7: 】がピューリタンからなる【8: 】を中核に議会派の軍隊を編成すると、マーストンムーアの戦い(1644)などで形勢は逆転した！ 議会派の新型軍は、1645年、【9: 】で王党派軍を破り1646年国王は降伏。国王チャールズ1世は【10: 】に逃げ込んだが、1647年、捕虜として引き渡された。
議会は国王に復位の条件として改革を約束させようとしたが、国王は頑強に拒否し、その間に長老派と独立派の対立がさ

らに深まった。議論がつづく間にチャールズ1世は逃亡し、こともあろうに、長老派※をイングランドとスコットランドの公式宗教にすることを約束してスコットランドと同盟をむすんだ。

※ここではカルヴァン派（プレスビテリアン）のこと。議会の長老派はその政治勢力！

2) 1648年、「第二次内乱」の開始

議会派の国軍 VS スコットランド軍 + 国王の反乱軍

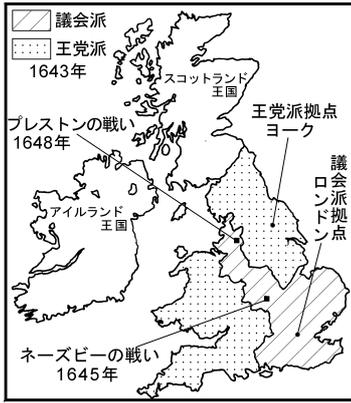
スコットランド軍はイングランドに侵入したが、同年8月17～19日のプレストンの戦いでクロムウェルに敗れ、他の国王派の勢力もまもなく鎮圧された。

1648年、議会の主力となった独立派のクロムウェルは、急進的な【11: 】(平等派)と組んで、穏健な【12: 】を議会から追放し(プライドの追放)、1649年、国王チャールズ1世を処刑し、【13: 】(コモンウェルス1649-60)を樹立した。

-----これ(1649)が、ピューリタン革命(狭義)の終期である！-----

広義では1660年まで

これに引き続くクロムウェルの独裁政治は、彼の死(1658)まで続いた！



クロムウェルの独裁

1) 長老派追放に引き続き、これまで自分たちを支持してきた急進的な兵士を含む【14: 】(あるいは平等派)とディゴーズ(真正水平派)11Wの反乱※を鎮圧し(1649年)、王政と上院を廃した共和国を樹立した。中産階級やジェントリの利益を守るためである。ちなみに、イギリス史上唯一の共和政である。王党派の拠点となったという口実で、アイルランドやスコットランドを征服し、重商主義政策を実行した。以下に詳しく述べる。

※ 実はこの2年前の1647年、【14】は人民協約 Agreements of the People という名称の政治改革案をクロムウェルと議会に対し発表し、①人口比による選挙区、②隔年議会、③信仰の自由、④法の前の平等など普通選挙に基づく徹底した共和政を唱えている。クロムウェルは賛成できなかったが、当時は「第一次内乱」の終期でさらなる武力闘争が必至の状況下、対立している場合ではなかった。1649年、【12】を議会から追放して国王を処刑すると、クロムウェルら独立派は【14】を弾圧し、彼らは反乱をおこした。 2013専修大リード文 出題頻度は低い

2) 1649年、クロムウェルは、王党派の討伐を口実に長老派の本拠地であった【15: 】を征服し植民地化した。スコットランドがチャールズ1世(1649年処刑)の子(後のチャールズ2世)を王と認めたことを理由に侵略したもの。クロムウェルはアイルランド人の土地を大規模に没収し、アイルランドは事実上植民地にされた。没収された土地はイギリス人に売却され、アイルランドのカトリック住民はイギリス人不在地主の支配に苦しむことになった。イギリスによる植民地支配・収奪は厳しく、深刻なアイルランド問題を後世に残した。アイルランド人餓死者100万人以上という1840年代半ばのジャガイモ飢饉は、この支配の苛酷さを前提にしないと理解できない。北アイルランド紛争は1998年4月、ベルファストにおいてイギリスとアイルランド間に和平合意が成立し、イギリスとの関係継続を求める立場のプロテスタント系住民と、南のアイルランド共和国との合同を求めるカトリック系住民双方が参加する自治政府(北アイルランド議会)が設置された。 No.132で詳述する。

3) 1650年、クロムウェルは、スコットランドを征服した。

4) 1651年、クロムウェル指導下の共和政政府は【16: 】を制定した。

航海法とは、貿易の際、商品の輸送をイギリス船と輸出国の船に限定する法であり、中継貿易を主体とするオランダ船を締め出し、イギリスによる植民地貿易の独占を目的とする重商主義政策である。制定時には絶対王政ではないどころか共和政だったが、それでも重商主義政策である。王政復古(1660)後、正式な議会制定法となった！

航海法は、第一次イギリス=オランダ戦争(英蘭戦争)を招き、勝利したイギリスは【17: 】の海上覇権を奪ったとされる。クロムウェルが指導したのはこれだけだが、王政復古後も重商主義政策は継続され②③は王政復古後に遂行された。イギリス=オランダ戦争は①1652-54、②1665-67、③1672-74の三次にわたる。

②第二次イギリス=オランダ戦争は、イギリス軍が北アメリカにおけるオランダ植民地ニューアムステルダムを占領したことが発端となった。③第三次イギリス=オランダ戦争は、南ネーデルラント継承戦争でオランダがフランスを妨害したことに対する報復で、フランスによるオランダ侵略戦争にイギリスが荷担(講義録No.111)。イギリスは3次にわたる戦争で、オランダ経済に大打撃を与えたが、皮肉にも1688年の名誉革命により、かつて敵対したオランダ統領をイングランド王ウィリアム3世として迎えることとなる。

「航海法制定が招いた事態は何か」という問には、イギリス=オランダ戦争全部ではなく、第一次イギリス=オランダ戦争を惹起し…と答えるべきである。

5) 第一次イギリス=オランダ戦争 1652-54 に勝利後、1655年、スペイン領ジャマイカ(ハマイカ)に侵攻、実効支配。正式には1670年領有。

6) クロムウェルは一貫して独裁政治を行い、1653年には長期議会を武力で解散させ、同1653年、終身の【18: 】に就任し、軍事独裁を強めたので、国民の不満は高まったが、誰も彼を止められなかった。

《厳密には》クロムウェルは1658年に没したが共和政は1660年まで続いた。 護国卿の「卿」を拡大すると…

卿

2013 神戸学院大学 抜粋

正解 問1 D 問3 B 問8 D

問1 イギリス(市民)革命が起こった当時の王朝はどれか、次のA～Dの中から1つ選べ。

- A ハノーヴァー朝 B ウィンザー朝 C テューダー朝 D ステュアート朝

問3 チャールズ1世の専制政治を批判し、議会が王に提出したものは何か、次のA～Dの中から1つ選べ。

- A 権利の章典 B 権利の請願 C 人権宣言 D 権利の宣言

問8 ピューリタン革命を熱烈に支持し、後に『失樂園』を著わしたのはだれか、次のA～Dの中から1つ選べ。

- A デフォー B スウィフト C バンヤン D ミルトン